



■目次

<特集：広報・ニューズレター編集委員会企画>

日本青年心理学会広報・ニューズレター編集委員会：with/after コロナ時代の青年

- 岩佐康弘：大学生にとっての部活動・サークル活動とは…………… 1
菰田孝行：青年の学びの場としての「実習」の現状－医療系大学の例…………… 2
永井暁行：授業運営の一翼を担った大学生たち…………… 2
杉浦祐子：今、日常生活を送ろうとすることは何につながるのか…………… 3

<書評：私のおすすめ、この一冊>

畑野 快：ジェームズ・E・コテ／チャールズ・G・レヴィン（著）河井亨・溝上慎一（訳）東信堂（2020 年刊）

『若者のアイデンティティ形成－学校から仕事へのトランジションを切り抜ける－』・ 3

<広報>

- 広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ …………… 4
事務局からのお知らせ …………… 5

<特集> with/after コロナ時代の青年

みなさんもお存じのように、新型コロナウイルスの影響によって青年を取り巻く状況は大きく変化しました。このコロナ禍の中にいる青年の現状をとらえること、また彼らに対する支援を考えることは重要なことであると考えられます。そこで、82号では上記を大きなテーマとし、この時代を生きる青年の「部活動・サークル活動」「実習」「遠隔授業」「日常生活」といった具体的な側面に焦点を当てた原稿をご執筆いただきました。これらの原稿をきっかけに、今後私たちが青年に対して何ができるのかを改めて考えることができればと思います。

（担当：日本青年心理学会広報・ニューズレター編集委員会）

大学生にとっての部活動・サークル活動とは

岩佐 康弘（広島大学大学院教育学研究科）

私は、本原稿の執筆に際して、自身の学部生時代（コロナ禍以前）も省みながら、現在のコロナ禍での大学生にとっての部活動・サークル活動について、考えてみたいと思います。

大学生の部活動・サークル活動への加入率は、就職みらい研究所（2016）によると 55.3% であり、正課外活動としてはアルバイトに次いで参加率の高い活動です。そして、活動に積極的に関与した経験は、キャリア形成時に困難に遭遇しても対処できる能力・特性（キャリアレジリエンス）に対して正の影響を及ぼすことが示されています（池田・伏木田・山内，2018）。私も学部から始めたオーケストラの部活動に演奏のみならず運営にも深く関わった経験があり、中学・高校の部活動経験とは少し異なり、困難な課題に主体的に取り組むことができた大切な経験として、思い出すことができます。

しかし、コロナ禍の現状では、オンライン授業が主流となっているように、入構制限が緩和されつつも、かつてと同様の部活動・サークル活動を行うことが困難な状況です。実際、

私が学部時代に所属していた部活のメイン活動である定期演奏会が中止となったことを先日知りました。その時、私は、苦渋の決断をした学生のことを思うと少し悲しく感じたと同時に、前例のない勇気のある早い決断を導き出したことに感心しました。

「新しい生活様式」が求められる状況に対して、学生は半年前に予想していなかった様々な対応や制限が求められています。適切な感染防止対策をとり身体的・精神的な安全の確保が前提ですが、このような未曾有状況では、前例という「答え」に頼りすぎず新たな様式での部活動・サークル活動を通して仲間と模索すること自体が、学生個人の心理的な成長に繋がるのかもしれませんが。

引用文献

就職みらい研究所 (2016). 「大学生の実態調査 2016」 — 大学生の生活実態編 —
https://data.recruitcareer.co.jp/wp-content/uploads/2016/02/daigakusei_seikatsujittai_160210.pdf

池田めぐみ・伏木田稚子・山内 祐平 (2018). 大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響 日本教育工学会論文誌, 42(1), 1-14.

青年の学びの場としての「実習」の現状－医療系大学の例

菰田 孝行 (東京医科大学)

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の猛威は終息が見通せず、対応に当たられている教職員の方々はもちろん、学生の皆さんも、心配が絶えない状況であると思われる。

筆者は、医科大学に所属している。医学部の中に医学科と看護学科が所在する単科大学であり、附属病院は、特定機能病院として、新型コロナウイルス感染症患者の入院及び外来診療にも当たっている。機会を頂戴したので、医療系大学の状況を述べたいと思う。

本学において最も対応に苦慮したのは、「実習」であった。医学科、看護学科共に、カリキュラムにおいて医療現場 (臨地) での実習が必須となっている。本学では、2020年2月の政府による小中高校等に対する休校要請後に、すべての実習を中止した。

何より憂慮したことは、附属病院で感染症患者の治療を行っていることにより、実習中の学生に感染してしまう危険性である。さらには、無症状の感染学生が実習に参加することにより病院内に感染症が広まる懸念も指摘された。そのため、完全中止に至った。

4月からオンライン・オンデマンド型の授業は開始されたが、実習の内容を完全に置き換えることは出来ず、実習の再開について学内で議論を重ねた。学生代表者との意見交換も行ったが、資格取得のために実習を再開することはやむを得ないという意見と、感染が心配なので実習を再開すべきではないという意見に二分されている状況であった。

資格取得や技術習得系の教育カリキュラムにおいては、現場での実習は不可欠である。本学では、全国的な感染症の状況を見ながら、7月に入ってから実習を再開した。それでも、学内の附属病院のみの実施で、学外の施設や機関での実習は、未だ再開に至っていない。

感染症が蔓延する状況下では、従来のように、現場での学びの場を提供することは不可能であろう。さらに、この状況はしばらく続くと考えられ、青年の学びの場を確保していく模索を続けていかなければならないと考えている。

授業運営の一翼を担った大学生たち

永井 暁行 (北星学園大学)

2020年度も振り返ってみるとあっという間です。4月から様々な問題に取り組んできましたが、それらを遠い昔のように感じます。今思うことは、大学の教育は教員だけでなく、学生・教員・職員の皆で作っていくものというあり触れた教訓です。

新型コロナウイルスの影響は全国的にとっても大きなものであり、私の勤務する北海道の一私立大学である北星学園大学・北星学園大学短期大学部(以下、本学)も例外ではありません。

本学は前期の授業を非対面で行うことになりました。これにより、大きな混乱や不安が生じました。4月に本学で実施した「自宅・自室での学習環境に関する緊急調査」でも、授業が実施されるのか、受講できるのか、学生の不安が見られました。パソコンの操作や、インターネット回線の問題、成績評価、就職活動など学生の抱えていた不安・課題は様々でした。

これらの不安や課題を少しでも解決するために、本学では遠隔授業サポートチームを組織しました。学生・教員双方の非対面授業について、問い合わせできる窓口を用意しました。その結果、非対面の授業の実施に伴う諸問題が、学生から多数届けられました。翻って言えば、学生からの問い合わせにより、遠隔授業サポートチームは授業で生じている問題をいち早く知ることができ、各科目担当教員に改善のための依頼・助言を行うことができました。

2020年度も大学で授業が行えるということは、各教員の努力によるものというものは間違いありませんが、それだけではなく学生・職員あるいは大学外の市民等、様々な方々の協力なくしては成り立たないものでした。後期になりましたが、新型コロナウイルスの影響がなくなったわけではありません。後期は前期にない問題がまた多様に生じることでしょう。これ乗り越えて大学教育を維持するためには、やはり学生・教員・職員の連携が欠かせないものであると改めて考えています。このような社会状況だからこそ、学生の力を心強く感じました。

今、日常生活を送ろうとすることは何につながるのか

杉浦 祐子（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

青年にとって、授業・講義、部活・サークル、アルバイト、生活習慣などに関する行動は自己形成に機能する日常的な行動である（山田，2004）と言われている。これらは自らそれにかかわることを選択した日常生活上の出来事であり、青年は身近な社会の中で他者とかかわりながら様々な経験を積み、ときに大変さを感じながらそれを乗り越えることを通じて“自分”を形成していくと言える。また、そういった日常的な出来事を大変だと感じる出来事として経験し対応することでその出来事を通じて成長感を感じていた（杉浦・小平・笹川・中村・横山・山崎，2017）。つまり、自らかかわることを選択した状況での経験は自分の糧となり、乗り越えれば得られるものがあると考えられる。

しかし、ソーシャルディスタンスをとって、三密を避けて、…と言われ、人とかかわることを制限されたり、様々な経験の場が制限されたりしている現在は、これまでは大変だと感じていた出来事を経験することすらできないという状況に直面していると言える。このような状況に不安も不満も多くあるだろうけれど、その中で感染防止対策をして授業を受けること、部活やサークル活動に参加すること、地域活動に参加すること、アルバイトをすること、それらをしないという選択も含めて、これまでのような日常生活を送ることに対応しようとしていたり対応できてきたと感じ始めていたりする人がいるのではないだろうか。

様々なことが制限される中で日常生活を送ろうとすること自体がのちの自分の糧になり、これまでは成長感や自己形成につながらなかった出来事でも、今後は成長感や自己形成につながるかもしれない。

引用文献

- 杉浦祐子・小平英志・笹川修・中村信次・横山由香里・山崎喜比古（2017）. どのような逆境経験が大学生を成長させるのか—大学生が経験する「大変な出来事」の内容に着目して— 日本青年心理学会第25回大会発表論文集, 26-27.
- 山田剛史（2004）. 現代大学生における自己形成とアイデンティティ—日常的活動とその文脈の観点から— 教育心理学研究, 52, 402-413.

<書評:私のおすすめ, この一冊>

[若者のアイデンティティ形成：学校から仕事へのトランジションを切り抜ける](#)
ジェームズ・E・コテ／チャールズ・G・レヴィン（著）

アイデンティティはもはや日常語であり、研究者でなくともその意味を知っている。そして、アイデンティティに付随するトランジション、ポストモダン社会などの魅力的（？）な言葉は、多くの人をアイデンティティ研究へと惹きつける。しかし、ひとたび学問的にアイデンティティ、トランジション、ポストモダン社会について理解しようとするとなればいかに困難であるかを知ることになる。これらの言葉を理解するためには、心理学、社会学を中心とした学際的知識を求められるからである。その理解の難解さゆえ、アイデンティティ研究に惹かれながらも遠のいてしまった大学生・院生や研究者は多いのではないか。

この本は、アイデンティティ、トランジション、ポストモダン（本書では後期近代）社会について学際的な立場から俯瞰し、それらについて理解する上で極めて役に立つ。第1部では、アイデンティティのルーツについて政治的、哲学的、科学的アプローチを俯瞰しながらまとめられている。特に、著者らはアイデンティティを社会、個人、自我の3つのレベルに分類し、それらの形成プロセスの歴史的変遷をまとめており、後期近代における若者のアイデンティティ形成を理解する上でまず知っておくべきことである。さらに、本書は読者の概念的理解を助けてくれるだけではない。このような後期近代を若者が力強く生きていくための方向性を示してくれている。第2部では、若者が後期近代社会に「適応」していく上でエージェンシー、アイデンティティ資本、アイデンティティ・ホライズンが鍵になること、第3部では、後期近代におけるトランジション、アイデンティティ発達の多様性、そしてその発達に及ぼす家族・友人や教育などの文脈的影響がまとめられている。そのため、アイデンティティについて理解を深めるだけでなく、教育・臨床分野の研究を進める上でも示唆に富む。

本書を読むことは、読者のアイデンティティ研究に関する混乱した頭を整理するだけでなく、若者をどのようにして適応的なアイデンティティ形成へと導いていくのか、そのヒントを与えてくれる。分野を問わず、これからアイデンティティを学ぶ人に、また、1度アイデンティティ研究から離れてしまった人にもぜひ薦めたい本である。

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第72号より、会員の皆様から意見や要望を募るとともに、自由な投稿・寄稿を促すこととしております。投稿・寄稿ルールについて、再度簡単に説明させていただきます。

- 会員から募集するのは、以下の5つです。
 - ① 特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」
随時募集。過去のNL記事を振り返りつつ、編集委員会で検討し決定します。
 - ② 書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」
随時募集。原則として最新号発行1ヶ月前に集約し掲載します。
 - ③ 書評執筆の希望 「書評執筆希望」
掲載書籍への書評執筆の希望者を、原則として最新号発行後1ヶ月間募集します。該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。
 - ④ 次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」
特集テーマへの投稿希望者は、原則として最新号発行後1ヶ月間募集します。
 - ⑤ 会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」
随時募集。投稿内容が本学会のNLの記事に相応しいかを編集委員会で検討し、掲載の可否を決めます。不掲載の場合は、投稿者に理由を開示します。
- 投稿・寄稿時には、必ず件名を「」内の通りとし、本文の最初にお名前・ご所属連絡先メールアドレスをお書きください。

- 書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが、編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか、最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み、改めて執筆を依頼します。
- すべての投稿先は、jsyap-nec@googlegroups.com（日本青年心理学会 広報・ニューズレター編集委員会）です。
- 原稿の字数は 800 字程度を原則としますが、電子版なので柔軟に対応いたします。

事務局からのお知らせ

I. 大会のお知らせ

今年度の大会は Zoom 開催となります。日本全国から、世界から、多数のご参加をお待ちしております。11 月上旬から Web 上で参加申込を開始いたします。Web サイトも随時、情報を発信していきますのでチェックのほど、よろしくお願いいたします。

日本青年心理学会第 28 回大会
会期：2020 年 12 月 5 日（土）～6 日（日）
会場：Zoom によるオンライン開催
<https://www.jsyap.org/annual-conference>

II. 『青年心理学研究』電子投稿開始について

青年心理学研究は、電子投稿システム(Editorial Manager®)に移行します。2020.11.1 から新規投稿を受け付ける予定です。修正投稿については従来通り、編集委員会事務局で受け付けますし、2021.3.31 までは従来の投稿とシステムでの投稿を併用します。詳細は [Web サイト](#)をご覧ください。

III. 学会メーリングリストをご利用ください

現在、電子版ニューズレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からのみの発信となりますが、どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Website : <https://www.jsyap.org>
振替口座：00940-6-273417
口座名称：日本青年心理学会
お問合せは E-mail でお願いいたします。